川内原子力発電所対策調査特別委員会記録

○開催日時

平成２８年５月２７日　午後１時３０分～午後２時２７分

○開催場所

第３委員会室

○出席委員（１０人）

委員長	森永靖子	委員	佃　昌樹
副委員長	森満　晃	委員	今塩屋裕一
委員	川畑善照	委員	川添公貴
委員	杉薗道朗	委員	福元光一
委員	井上勝博	委員	小田原勇次郎

○議長（地方自治法第１０５条による出席）

議長　上野一誠

○その他の議員

議員	江口是彦	議員	谷津由尚
議員	新原春二	議員	成川幸太郎

○説明のための出席者

危機管理監	中村　真	専門職	阿南哲也
防災安全課長	寺田和一	原子力安全対策室長	遠矢一星

○事務局職員

事務局長	田上正洋	課長代理	瀬戸口健一
議事調査課長	道場益男	主幹兼議事グループ長	久米道秋

○審査事件等

１　調査事項（川内原子力発電所の安全対策に関する調査）

・　平成２８年熊本地震における川内原子力発電所の状況について

２　審査事件

・　陳情第４号　鹿児島県知事に対し、九州電力に川内原発の免震重要棟の早期建設を求めるよう要請する意見書の提出を求める陳情

△開　　会

○委員長（森永靖子）それでは、ただいまから川内原子力発電所対策調査特別委員会を開会いたします。

本日の委員会は、お手元に配付しております審査日程により審査を進めたいと思いますが、御異議ありませんか。

［「異議なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）御異議ありませんので、お手元に配付しております審査日程により審査を進めてまいります。

ここで、傍聴の取り扱いについて申し上げます。

現在、８名から傍聴及び写真撮影の申し出がありますので、これを許可します。

なお、会議の途中で追加の申し出がある場合にも、随時許可します。

―――――――――――――――

△平成２８年熊本地震における川内原子力発電所の状況について

○委員長（森永靖子）それでは、川内原子力発電所の安全対策に関する調査に関し、平成２８年熊本地震における川内原子力発電所の状況についてを議題といたします。

まず、当局に説明を求めます。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）それでは、資料１を御準備いただきたいと思います。

資料１は、平成２８年熊本地震における川内原子力発電所の状況についてと題しまして、今回の熊本地震における主な三つの地震に関しての発電所における観測データを示しております。

その中で、上の表の補助建屋最下階、海抜マイナス２１メートルと、補助建屋１階、海抜１３．３メートルの広報用地震計は、中段の参考の１に記載しました原子炉自動停止用の地震感知器付近にある広報用地震計で、補助建屋最下階、岩盤上の位置に当たります海抜マイナス２１メートルの地震計で、４月１６日に最大８．６ガルを観測しております。

なお、参考の１に掲載した原子炉停止用感知器の設定値は、岩盤上の海抜マイナス２１メートルにある感知器において、水平で１６０ガル、鉛直で８０ガル、また１３．３メートルの補助建屋１階の感知器では水平２６０ガルで、それ以上を観測した場合、原子炉が自動停止するよう設定されておりますが、今回の揺れはその設定値を大きく下回っており自動停止には至っておりません。

また、上の表の下のほうに米印で記載しましたが、中段あたりになります。平成９年の鹿児島県北西部地震では、最大加速度６８ガルを観測しておりますが、この観測地は海抜マイナス９．４メートルの原子炉建屋基礎の上端部であり、今回のマイナス２１メートルの測定値とは単純には比較できませんが、参考までに記載しております。

なお、上の表にあります海抜マイナス２１メートルと補助建屋１階の海抜１３．３メートルの広報用地震計は、平成９年の鹿児島県北西部地震以前は設置されておらず、北西部地震以降、自動停止用の地震感知器の近くに広報用として地震計を設置されたものになります。

また、今回の地震において４月１６日に鹿児島県薩摩地方、具体的には長島町ですが、長島町のほうで震度５弱を観測したことから、川内原子力発電所においては保安規定により制御棒や各冷却系のポンプ、またディーゼル発電機や補助給水ポンプ等の工学的安全施設等の作動試験等を４月１６日、１７日に実施し、異常がないことを確認されております。

以上で説明を終わります。

○委員長（森永靖子）ただいま当局から説明がありましたが、質疑、御意見ありませんか。

○委員（井上勝博）熊本地震が起こり、鹿児島でもかなり大きな揺れを感じて、携帯電話のアラームも大きな地震の直前に２回鳴って、大変不安な状況があったわけですけれども。

九州電力に対して問い合わせとかメールとか、かなり原発大丈夫かという不安っていうのが来たということなんですけれども、新聞でも報道をされておりますが、当局はその辺の情報は把握されていらっしゃいますか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）事業者等に対する問い合わせ等につきましては新聞報道等でしか確認しておりませんが、本市が受けた御意見等に関していいますと、これ４月になんですが、４月の地震に関するものとして受け取っていただきたいんですが、電話が４２件、はがきが７件、メールが３３件、ファックスが６件、計が８８件でありまして、うち市内の方だというふうに特定できたのは５件になります。

あと、５月以降になりますとまだ集計等は行っておりませんが、電話だけでいいますと現在まで

５件ほど、５月に入ってからは５件ほどお電話をいただいている状況です。

以上です。

○委員（井上勝博）新聞報道で把握されたと思うんですけれども、九州電力に対する問い合わせっていうことではどのような認識ですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）済いません、新聞記事等を持ってきておりませんので具体的な数字は覚えていませんが、数千件単位で御意見があったというふうに認識しております。

以上です。

○委員（井上勝博）約５，０００件だったと。メールが非常に多かったということでありますけれども、それだけやっぱり非常に不安、心配が広がったという現状だと思うんです。

問題は、今回の熊本で起きた２回の大きな地震によって原発がどれだけ揺れたかどうかということも問題だと思うんです、確かに。これについては、北西部地震が起きた時点では、地震の波形も含めた詳しいデータを公開したようですけれども、今回はそのような、さらに詳しいデータの公開は当局は受けているんでしょうか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）それぞれの地震における観測地データというのはいただいておりますけれども、その波形までというものまでは提供はまだいただいておりません。

以上です。

○委員（井上勝博）こういう加速度が幾らあったというだけではなくて、ほんとにこんな小さかったんだろうかと。かなり大きく揺れたがなということで、やっぱり九州電力はちゃんと生のデータを示すように求めていただきたいなと思います。

それで、今回の地震によって建屋がこの程度で終わったということで、結局、原発は自動停止もなければ手動停止もならなかったわけですけれども、ただ今回の熊本地震っていうのは非常に大きな特徴がありました。前震と本震ということで、後のほうが大きい地震だったということです。それがかなり広範にわたってほかの断層も刺激して動いた可能性があると。可能性じゃなくて動いたんです。大分のほうとかそれから南のほうにも下ってきたりしているわけです。気象庁も、今回の地震はあんまりこれまでの地震の経験からいうと、経験してないというそういう地震である。だから、今後予測できない地震であるということで。やはり、不測の事態に備えて、原発をとめるべきであるということを多くの専門家も指摘してるわけですけれども。

当局は、九州電力に対して不測の事態に備えてとめるべきであるという認識があるかどうかというのが一つ。

それから、もう一つ、今回の熊本地震で益城町で１，５８０ガルという加速度が観測されて、これはもうはるかに川内原発の基準地震動は超えるし、ストレステストによるクリフエッジも超えてしまう。ですから、１，５８０ガルが直撃したらこれはもうひとたまりもないだろうという揺れなわけですけれども。

こういう益城町で起こるような地震っていうのはマグニチュード６．５で、そんなに珍しい大きな地震ではないわけです。しかし、揺れは非常に大きかったということで、こういった地震が川内原発を直撃するのではないかという心配もあったわけですが、その辺の当局の見解をお伺いしたいと思います。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）まず、今回の熊本地震についてですが、例えば地震調査研究推進本部のほうの熊本県の主要活断層帯で起きる地震としては、布田川断層帯の各区間でマグニチュード７から７．２以上、日奈久断層帯の各区間でマグニチュード６．８から７．５以上、またその区間が連動した場合はそれ以上の地震が起こるというまず評価があります。

また、そういった今回の、九州でも陸地では一番大きな断層帯だと思いますが、同断層帯での過去の地震の発生状況を見ますと、ここ数百年の間に、おおむね１００年から１２０年の間にマグニチュード５から６台の地震が発生しており、特に１８８９年には熊本市の市街地直下でマグニチュード６．３が発生して、死者２０名、家屋の全半壊４００戸以上というような大きな被害も出ているようです。

以上のような過去の発生状況や評価、今後の予測といったものから、今回の地震が、いつ起こるかというのは想定できませんけれども、規模的なものとして想定できないというような想定外の状況ではないというふうに思っております。

また、今回、熊本の益城町の観測地点の地表観測所において、合成値でありますが１，５８０ガルという高い加速度を観測しておりますが、やはり

この揺れの強さ、速度自体というのはその地盤の状況によってかなり違うと思っておりますので、また地下にありました観測地点では２３０ガル台だったというふうにも聞いておりますので、そういう地質構造の違い、そういったものがあるのではないかというふうに認識しております。

以上です。

○委員（井上勝博）それから、もう一つ。今回の熊本地震が起きた直後に地震調査研究推進本部が入って、これまで断層がなかったところに枝分かれ断層ができたということで、それが２メートルずれていたということです。今まで断層がないところに突如として断層があらわれて、２メートルもそれが横ずれをしたと。

こういった事態がつい熊本で、近くで起こったわけであって、それが中央構造線に沿っているわけですよね。この中央構造線の延長上に甑島断層だとか、またさまざまな活断層があるわけですけれども。そういったことなどを考えると、まだまだ私たちの経験で地震っていうのが全部把握し切れているわけではありませんので、もし万が一、敷地内で２メートルのずれが起こるような断層が突如としてあらわれるというようなことになった場合のことも考えておかなくちゃいけないと思うんですよ。そういう点では、今までの経験値から「大丈夫だ、大丈夫だ」と言われても、心配、不安っていうのは決しておさまらないというふうに思うんです。

ですので、私は、当局としては、やはり原発がとまって１年１１カ月も電気は不足しなかったわけですから、電気需要との関係からいっても、今原発をやはりとめて総点検するということは求めるべきであろうというふうに思います。その点については検討されたことはないですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）まず、先ほど２メートルずれたことが経験値がないということで、その経験という面ではちょっとわかりませんが、地震調査研究推進本部の中にあります布田川断層帯、日奈久断層帯という評価書の中の将来の活動というところがございまして、そこには先ほど申しましたマグニチュードも書いてありますが、活動した場合には２メートル程度、３メートル程度のずれが生じるというようなことも評価書の中に入っておりますので、そういった大きな動きがあるのではないかという評価もなされてたことは実際だと思っております。

なお、原子力発電所の敷地になりますが、５キロ、１０キロ、３０キロといういろんな形で活断層の調査をしてきておりますが、特に発電所敷地におきましては入念な調査をした上での評価も今回受けておりますので、そういった活断層はないということでの評価になってるというふうに私どもは認識しております。

以上です。

○委員長（森永靖子）また後でしてください。

ほかに委員の方。

○委員（佃　昌樹）実は、きのうかな、おとといかな、九州電力とちょっと交渉をやったんですが、ちょっと回答の時期がはっきりしないので、いつこれ回答するかもわからないので、議会のほうからもちゃんと念を押して聞いておいてもらいたいことがあります。

それは、今、熊本で起こっている地震は中央構造線をもとにしながらその近辺で起こっているわけですよね。布田川断層にしても日奈久断層にしても。そこで疑問だったのは、中央構造線がだんだん動き出してきた、地震の最繁期に入ってきているかなと思うんです。その中央構造線に引き続き、川内を横切っている仏像構造線というのがあります。その仏像構造線というのは原発の近くを通って南薩のほうに抜けているわけですよね。３号機の増設をするときには、その仏像構造線は消えていました。１、２号機増設時には仏像構造線はちゃんと中央構造線の延長線として書かれていた。それがなくなった。

そのなくなった理由、それから本当にその仏像構造線が川内原発に対しての影響が全くないのかどうなのか。その辺のところをちょこっと聞いたんですが、後で回答さしてくださいという原子力発電所側の意見でしたので、後でつったらいつになるかわからんので、議会でこういう質問が出たのでっていうことで、できるだけ早いうちに回答を得ていただきたいなと思います。

それから、二つ目、北西部地震のときには肝心な地震計がうっがれたといって、作動しなかったということで、私たちも情報の入手については非常にえっと、唖然とした気持ちもあったんですが。今回は、地下の基底部のところ、地上１３階それから地表面、３カ所で測定をして市民に広報するということでありました。

そのときの基準なんです。ちょうどプリントの真ん中に書いてあるんですが、この基準の水平方向１６０ガル、鉛直方向が８０ガル、それから補助建屋の１階、１３．３メートル、上のほうですね、これが２６０ガルとあるんですが。これの基準、これ原子炉が停止する、これだけ揺れたら自動的に原子炉が停止になりますっていう数でしょう。これは全国的に見てどうなんですか。高いんですか、低いんですかという問題が一つ。

それから、もう一つは、原子炉の基底部の揺れが原子炉を停止するまでにも至っていない。しかし、建屋の１３．３メートルの地点では停止の信号が出てる。これ違ったね、違ったあれが出たときに、その判断はどうするのかと。これも曖昧だったもんで、できるだけ一方でも原子炉停止の信号がでたら停止すべきだと思うんだけれども、あなた方の判断ちゅうのはどういう判断をしているのかな。また、その判断に基づいてきちんと九電にも物を言わにゃいかんことになるけれども。私は、一方であってもやっぱりきちっと停止をすべきだというふうには思うんですが、いかがですか。二つほど。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）先ほどの自動停止用の設定値の件なんですが、今、１日に２回、原子力規制庁のほうから四つの原子力発電所の現状というのがメールで送ってくるわけですけれども、川内、玄海、伊方、島根。済いません、今ちょっとメールを探そうと思ったんですが、自動停止用のその数値というのもそのメールの中で実際に地震が起きたときには入ってきてまして、余り大きな差はなかったと思います。

済いません、川内が今１６０ガルですけども、玄海が１７０ガルぐらいだったと思うんですが、その設定根拠についてはちょっと詳細には確認はしておりません。

もう一点、マイナス２１メートルのところと地上、ＥＬでいうと１３メートルのところで、どちらか観測した場合にとまるかということなんですが、私の認識ではどちらかの設定値を超えた場合には原子炉が自動停止するというふうに認識してるんですが、これについてもちょっと事業者のほう、確認さしていただければと思います。

以上です。

○危機管理監（中村　真）済いません、１点目の仏像線の関係については、今御質問がございましたので、こちらかも九電のほうには確認してみたいというふうに思います。

設定値関係については、今、室長のほうからあったとおりでございます。設定値については、私の記憶でいきますと、それぞれの発電所におきまして周辺の活断層それから地盤の強度そういったものに基づいて、それぞれの発電所で設定をしてあるというふうに認識をしております。

以上です。

○委員（佃　昌樹）メールの中に入っているんだったら、それぞれ基底部の地震計の基準は水平、鉛直、これだけだとか、それから地上のほうはこれだけだとか、ちょっと一覧表にしてもらえないかな。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）後ほどの提出でよければ、今その四つの発電所についてのデータはたしか確認できると思いますので。

といいますのが、今すぐ確認しようと思ったんですが、何もない１日に２回メール配信が来るときには載っていないんですけども、実際に地震を観測したときのメールでは四つの発電所はどうであるっていうことが数字まで出てきますので、そういったものを参考にしながら、後の提出でよければ提出したいと思います。

以上です。

○委員長（森永靖子）ぜひ、そのようにお願いします。

ほかの委員の方。

○委員（井上勝博）先ほどの益城町で１，５８０ガル。１，０００ガルを超えると当たり前のように最近ではそういう加速度が観測されるわけです。６２０ガルが基準地震動ですよね。ストレステストのクリフエッジが、１号機と２号機はちょっと違ったと思いますが、大体１，０００ガルですよね。この６２０ガルを超えるような地震動は想定されてないわけですけども、仮に６２０ガルを超えた地震動があった場合に原発はどうなるのか。それから、１，０００ガルを超えた場合にどうなるのか。その辺については、当局の認識はどういうお考えなんでしょうか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）現在の基準地震動の６２０ガルというのは、あらゆる想定をした中で最高これだけ影響が来るかもしれないという数字でありまして、そこになったら壊れるとか壊れないとかいう数字ではございませんので、

基準地震動６２０ガルに対しては安全性を損なうことはないというふうな評価を得てるところになります。

また、クリフエッジ、ストレステストでおおむね１，０００ガル程度ということで出ておりましたが、それは当時のまたストレステストでありまして、その後新しい規制基準対応等で、たしかストレステストのときには低圧遮断機が最初のクリフエッジを迎える機器だったと思いますけれども、今、大容量発電機等を直接結ぶようなルートもできていたりしますので、その数字はまた若干変わってくるのかなというふうには思いますが、もし仮に何らかの理由で炉心を損傷するような状態が発生した場合ということでＳＡ対策、過酷事故対策、そういったものを対策をとって審査を受けてるということになりますので、そういったことについて御理解いただければと思います。

以上です。

○委員（井上勝博）１，０００ガルを超えたら予測はできないというふうに理解してよろしいわけですね。要するに、過酷事故も起こるかもしれないという認識だという話ですよね。

そうすると、やっぱり全国各地で１，０００ガルを超える揺れっていうのは、加速度というのはどこでも起こる。今回は益城町で１，５８０ガルだったわけで。先ほどは、地質構造によって揺れの大きさは違うというふうには言ってますが、全部が全部その岩盤上ではないわけで、岩盤上にない建物などもあるわけです。

例えば自動停止がするのが、自動停止の基準があるわけですよね。この自動停止の基準というのは、揺れた場合に即時に自動に原子炉に制御棒が入ってとまるというふうに私は理解してるんですが。しかし一気に１，０００ガルを超えるような揺れが起こった場合は、自動停止するどころか、そもそも破壊されるというふうな認識であるならば、やっぱり私は今回全く見つからなかった断層が動き、２メートルも動いたということは重視すべきではないかなと。

だから、そういった観点から地震調査研究推進本部がそのメカニズムをどうこれから分析するかわかりませんけれども、この分析を待って、万が一の地震に備えるということはあってしかるべきじゃないかなというふうに思うんです。新しい知見なわけです、この２メートル。これまでも活断層が発見されていないところで揺れるっていうことはあったとしても、２メートルもずれたのは初めてということなんです。ですから、新しい知見があったわけですので、当局としては安全側にそれは見るべきであるというふうに思うんですが。

先ほどは、全く、九州電力に対して再調査をという考えはないようはことをおっしゃってるんですが、もうそれはそのとおりですか。再調査は求めないということですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）先ほどもちょっと申し上げましたが、１，０００ガル以上揺れるような、観測したようなところにつきましては、地質構造等に大きな違いがございます。また、今回の熊本地震を受けて、原子力規制委員会のほうでも直ちに、今、基準値震動の審査においての何か基準を見直さなければいけないというようなそういう必要性はまだ考えていないというふうな答弁もございますので、新たな知見として、新たな情報が、知見が出てくれば、またそういったものも検討されて反映されていくものと考えております。

以上です。

○委員（井上勝博）いや、新たな知見ではないかということなんです。その活断層がなかった、断層がなかったところに枝分かれして２メートルずれたというのは、新しい知見ではないかということなんですが、それは違うんですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）日奈久断層帯におきましても布田川断層帯におきましても、いろんな小さな断層も集まったような大きな断層帯になっておりますので、その今回発見されたものが新しい知見なのかどうかということに関して、私がそうであるそうでないというようなお答えはできかねます。

以上です。

○委員長（森永靖子）よろしいですか。

ほかの委員の方、ないですか。

［「なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）質疑は尽きたと認めます。

次に、委員外議員の質疑はありませんか。

［「なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）質疑はないと認めます。

以上で、平成２８年熊本地震における川内原子力発電所の状況についてを終了します。

―――――――――――――――

△陳情第４号　鹿児島県知事に対し、九州電力に川内原発の免震重要棟の早期建設を求めるよう要請する意見書の提出を求める陳情

○委員長（森永靖子）次に、閉会中の継続審査となっております陳情第４号鹿児島県知事に対し、九州電力に川内原発の免震重要棟の早期建設を求めるよう要請する意見書の提出を求める陳情を議題とします。

本陳情については、前回、３月の委員会において、井上委員から当局に対し、免震重要棟に関する資料提出の要求がありました。

ついては、本日、資料が提出されておりますので、まず当局に資料の説明を求めます。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）それでは、資料２を御準備ください。

この資料２は、前回、同委員会において、新たな規制基準において運転までに求められているもの、またバックアップ施設として５年間の猶予があるものがわかる資料を提出するよう求められましたので準備した資料になりますが、この資料は表題に記載があるとおり、平成２６年２月に同委員会において原子力規制庁を参考人招致された際の原子力規制委員会の資料の抜粋になります。

内容としましては、中央のあたりに「基準への適合を求める時期について」とありますが、その下の表の中央に記載されているものが、法に基づき運転等に際し、基準に適合し許認可を受けなければならないもので、右側の枠がバックアップ施設として５年後までに求められるものになります。

その中で、緊急時対策所は、中央の枠の下から２ポツ目に記載があるとおり、猶予期間が設けられてはおらず、運転に係る許認可を受けるに当たって基準に適合していなければならないものになります。

なお、右側の５年間の猶予のある特定重大事故等対処施設及び３系統目の直流電源については、現在、原子力規制委員会に対して申請が行われ、審査中の案件になります。

以上で説明を終わります。

○委員長（森永靖子）ただいま当局から説明がありましたが、このことについて質疑、意見はありませんか。

○委員（井上勝博）この資料を見ますと、緊急時対策所については、もうあるわけですね、あるという認識ですよね。そして、免震重要棟の建設については、特に規制基準で求められているものではなく、九州電力が自主的にそのほうがいいだろうということで免震重要棟をことしの３月までに完成させるという約束をしたという、そういう理解でよろしいんですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）はい。その御理解でいいんではないかというふうに思います。

以上です。

○委員（井上勝博）新規制基準との関係では、免震重要棟は義務づけられてはいない。

しかし、免震重要棟については県民に対するやっぱり公約であったし、議会で議論するときにもこの免震重要棟っていうのは何回も議論されて、もうすっかりこの規制基準なんだけれども猶予期間を設けられたもので、ことしの３月までに完成すればその猶予期間内に完成したということで認められていると、規制委員会は何というだらしないことをしたんだというふうな認識だったわけです。しかし、今言ったように違うんだよと、規制基準との関係はないんだよと、自主的なものですよというお話なんでしょうね。

そこでお伺いしたいんですけれども、免震重要棟の建設よりも耐震等のほうが２年近く早く建設できるという文書が九州電力から出されております。３月２５日の川内原子力発電所１、２号機のさらなる安全性・信頼性向上への取り組みに係る原子炉設置変更許可申請（補正等）についてという文書の中で、耐震構造のほうが２年程度早く完成できる見込みというふうに書いてあるわけです。

免震重要棟よりも耐震構造のほうが２年早くできるということは、免震重要棟は２年以上かかるという意味でもありますよね、逆に言うと。そういうことになりますよね、そうならないですか、どうなんですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）その２年程度ということに関しましては、原子力仕様の免震構造の審査を受けるに当たって、その審査をクリアするためにはそれぞれ加振試験とかいろんな試験を繰り返しながら実証データをそろえていった上で審査に臨んでいかないといけないということで、審査期間的なものが２年程度、耐震に比べると長引くんではないかというような意味合いだというふうに認識しております。

以上です。

○委員（井上勝博）そうすると、新規制基準に適合しているということで、準備書ということで発表されてから免震構造の免震重要棟をつくる期間というのは２年以上なかったわけですよね。

そうすると、九州電力はできもしない約束をしていたということになるんですけれども、それはそういうことになるんですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）多分、従来のほうからそういう免震棟の構造、設計をしていく中で、また他の電力の審査状況等を踏まえながら、そういった部分、課題というのが見つかってきたんだというふうに認識しております。

以上です。

○委員長（森永靖子）ちょっと井上委員に申し上げます。

ほかの委員の方の意見も聞きたいと思いますので。どうぞ。

○委員（井上勝博）そうすると、当初で免震重要棟が何年でできるかということも当てずっぽうで、いわばことしの３月までにつくるんだというふうに約束したということになるわけで、非常にほんとにどれだけの検討がされたんだろうかと、検討された様子が見えないというかな。本当に安全に責任を持って過酷事故対策もきちっとやるというそういう点で、慎重に慎重に検討して、そして決定して、ことしの３月までというふうにしたものではなかたっていうことをみずから暴露するような事態じゃないかなっていうふうに思うんですが、当局はどうお考えですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）自主的対策の発表等の例えば時系列を見ますと、九州電力が自主的対策として免震重要棟をつくると言ったのが、平成２４年になってるんですが、その後に新しい規制基準等もできておりまして、そういった基準等に照らし合わせながら検討されてきた結果だというふうに考えます。

以上です。

○委員長（森永靖子）ほかの委員の方、ありませんか。御意見ありませんか。もうよろしいですか。

○委員（井上勝博）今の議論でも、やっぱり何か納得できないです。やっぱりいい加減だなって思います。

これは誰が言ったとは言いませんけれども、関係者でも、あのときは勢いだったんですよという方もいらっしゃって。そうなんですかと、勢いで言っちゃったんですかというふうに問いかけたこともあるんですけれども。やっぱり、ほんとに事故が起きたときに大変なことになる施設なんだという認識がどれだけあるのかなということを心配するわけです。

いずれにしても、今この問題についてはどういうふうになってるのか。原子力規制員会はこの問題に関してどういう態度をとっているのか。まだこれは保留になってますよね。要するに、耐震構造でいいよというそういうふうになっているわけじゃないですよね。その辺はどうなってるんですか。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）今、保留という形ではなくて、審査を受けてる状況です。特に、まだ審査会合等の上の会議にはなかなか上がってきませんが、担当者レベルでのヒアリングというのは審査のほうはずっと進んでいってるというふうに聞いております。

以上です。

○委員（井上勝博）そうすると、一体、過酷事故ってほんとに真剣に考えてるんだろうかということが出てくるんです。こんなずるずるずるずる。今の緊急時対策所というのを見た人がびっくりしてますよね。トイレが一つしかなく、工事現場にあるようなトイレだったと。そこは物置になっとったということで。本当に小さな部屋に長期間の過酷事故になったときに作業員があそこにいられるのか。支援棟がないわけですから、着替える場所はどうなるのかと、支援棟で解決するわけですよね、支援棟ができてこそ。居住空間はどうなるんだろうかと。そういうものが一切、どうなるのかなという状況のままで推移していると。審査も急いでやろうという気もないみたいだと。本当に過酷事故対策というのがあり得るんだと、そのための備えをきっちりしとかなきゃいけないんだという、そういう緊張感みたいなものを感じないんですよね。そう思われませんか、どうでしょう。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）新しい規制基準ができるまでに、福島の教訓を生かして基準をつくる際に緊急時対策所の機能というものが求められたと思っております。その中で、川内原子力発電所における必要最低人員もしくはその交代要員を含めた人数が、１週間外部からの援助なく、

そこで過ごせるということでの評価、審査を受けておりますので、今でも対応は十分可能だと思いますが、さらにいい対応ができるような形でよりいいものができればと思っております。

あと、審査を急いでる、急いでないということに関しましては、私たちのほうでそこまで把握はできておりませんので、今審査中ということだけをお伝えしたいと思います。

以上です。

○委員（井上勝博）とにかく、そういう緊張感がないという感じが、印象を受けます。要するに、今の緊急時対策所に対していろんな指摘をされて支援棟をつくると、居住空間をちゃんと設けるんだというふうになったわけですよ。それをもたもたしてるのも現実じゃないですか。それに対して、規制委員会に申し入れるなり、九州電力は規制委員会の審査を待ってることですけども、だから規制委員会になるわけですけども、規制委員会何やってるのかということは、やっぱり私は言うべきじゃないかなと思います。その辺は、全然言うつもりはないでしょうか。

○危機管理監（中村　真）今、井上委員のほうからいろいろ質問ございました。

答弁をしてるとおり、審査中ということでございます。委員の言われたとおりなのかどうかというのは、また我々のほうとしましても調べられる部分があれば調べてみたいと思います。そういった状況の中で、井上委員の言われるとおりなのかどうかというのも踏まえながら、そこは今後検討させていただきたいと思います。

以上です。

○委員（森満　晃）済いません。今、規制委員会に全国で再稼働を申請している中で、免震か耐震かということで、一番の喫緊の今の構造の検討状況の一番新しい情報がもしありましたら、把握してましたら教えてください。

○原子力安全対策室長（遠矢一星）現在の状況ですが、建設中の大間を除く発電所として今１５発電所、２５機が申請しております。免震重要棟のみで申請してるところというのはございません。３月には島根原発が耐震棟に、４月には東北電力の女川と東通が耐震構造に変更しました。

強いて言えば、前回も紹介したかもしれないんですけども、柏崎刈羽の６、７号機のほうが既存の免震重要棟と３号機の中央制御室の近くにある部屋を事象によって使い分けるというような申請をしてるようでございまして、それについてはちょっとどういう審査になってるのかっていうのはまだ見えておりませんが、いずれにしてもまだ許可までは至っておりませんので、ほぼ全ての施設が耐震構造による緊急時対策所をつくるということでの今申請、審査になっているようです。

以上です。

○委員長（森永靖子）よろしいですか。質疑は尽きたと認めます。

次に、委員外議員の質疑はありませんか。

［「なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）質疑はないと認めます。

そのほか、本陳情に関して当局に確認しておきたい事項はありませんか。

［「なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）質疑はないと認めます。

［「なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）委員外議員の質疑はありませんか。

［「なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）質疑はないと認めます。

それでは、本陳情の取り扱いについて協議したいと思います。

御意見はありませんか。

○委員（森満　晃）去る２月、陳情第２４号、２５号の審査に伴いまして九州電力の参考人招致をしまして、今話題になっておりますこの緊急時対策所について説明を受けましたが、その時点からしますと今のこの緊急時対策所の計画に変更があっている状況でございます。

また、本陳情に関しまして、本日、当局のほうから熊本地震について説明を受けましたが、この点についても直接九州電力のほうから説明を受けてもいいのではないかと思っております。

以上です。

○委員長（森永靖子）ただいま副委員長のほうから本陳情審査に関して改めて九州電力を参考人招致にしてはとの意見がありましたが、このことについて何か御意見はありませんか。

○委員（川添公貴）採決を希望します。

○委員（井上勝博）今、森満副委員長のほうから、この問題については九州電力からも改めて熊本地震もあわせて参考人に招致すべきではないかという意見に対してどうするかというふうに委員

長が言われたので、私は賛成だと言ったわけですけれども。

採決っていう声がありましたが、これはちょっと流れからするとどういうふうに考えりゃいいんですか。流れをどう考えるんですか。

○委員長（森永靖子）九州電力、参考人招致につきまして、ただいま意見が分かれたように思います。このことに関して起立によって確認したいというふうに思いますが。参考人招致について御意見が少し別れましたので、このことについて起立によって確認していきたいというふうに思いますが、いかがでしょうか。

参考人招致について賛成する委員の起立を求めたいと思いますが、いかがでしょうか。副委員長のほうから参考人招致をしてはどうかという意見がありました。川添委員のほうから採決してくださいという意見がありました。

○委員（井上勝博）済いません。参考人招致について採決なんですか。

○委員長（森永靖子）はい。

○委員（井上勝博）じゃあ、もうそういうことであれば。

○委員長（森永靖子）そのようにさせていただきます。

川添委員、よろしいですか。進めたいと思います。

それでは、参考人招致について賛成する委員の起立を求めます。

［賛成者起立］

○委員長（森永靖子）起立多数であります。よって、九州電力の参考人招致については実施することに決定いたします。

それでは、招致の日程についてお諮りしたいと思います。

招致の日程については、改めて九州電力と調整したいと思いますが、日程調整については委員長に一任いただきたいと思います。ついては、そのように取り扱うことで御異議ありませんか。

［「異議なし」と呼ぶ者あり］

○委員（川添公貴）継続審査っていうことになったんで、それはそれでよしとして、多数決でしたから。

審査日については、おおむね３週間前に教えていただけませんでしょうか。もう６月、７月、盆が入るし、行事がたくさん入るんで、最低でも３週間ぐらい前に教えていただければありがたいんですが、そのようにお取り計らいいただけますでしょうか。

○委員長（森永靖子）はい、承知いたしました。それでは、そのように取り扱っていきたいと思います。

それでは、本日の陳情審査はここまでとし、陳情第４号の審査を一時中止します。

○委員（佃　昌樹）せっかく参考人招致するんですから、いつも九州電力が出してるのは、熊本でこれだけの揺れがあったけれども、九州電力ではこれだけの揺れしかありませんでしたと、こんな言い方しかしとらんやったな、ずっとな。事実はそうなんだけど。

予測の問題をどう考えてるのかっていうことを、やっぱり九州電力は九州電力でやるでしょうし、また九州電力も専門家を通じて甑断層とか市来断層帯のこっちのほうに波及する予測についてどの程度あるのかないのか。やっぱりその辺のところもせっかく来るんだから、ただこうでしたああでしたじゃなくて、そういったものもやっぱりきちっと把握をして来ていただくようにお願いしてください。

○委員（川添公貴）確認したいんですが、今、継続をされたのは何を継続されたんですか。

○委員長（森永靖子）陳情第４号です。

○委員（川添公貴）陳情第４号ですよね。であるならば、それに沿った形で呼んでいただかないと、呼ばれる方は、それはせっかくの機会だからそれはもう貴重な時間なんでいろいろ活用、流用したいっていうのはわかりますけど、陳情４号を審査するために継続したんだから、きちっとそこは区分けをして、その他の甑断層とか、それからそれが連動したんじゃないかとかいうような話もあるし、中央構造線もそういう影響したんじゃないかとか、ほかにはガイドパイプが曲がって制御棒が入らないっていうネット上の噂も出てるんですよね。これは、川内原発って書いてあって、その絵はＢＷＲの図が載ってたんですけど、そういうのもあるんです。

だから、いろんなことがあるんで、そういうことはやっぱりきちっと区別をして、この件だけで呼んでいただく。それ以外のことが必要事項があればまた議決を諮って、さらなる安全対策っていう形でお呼びいただけばどうでしょうか。そのよ

うに取り計らっていただければ。

○委員（井上勝博）先ほど森満副委員長のほうは、この陳情の審査と同時に熊本地震についての関連して参考人を呼んだらどうかという提案だったので、もう既にそういうことで先ほどそういう確認をされたという認識なんですけど。

○委員長（森永靖子）副委員長のほうからも熊本地震に対する川内原発の状況についても確認ということで皆さんも承知していただきましたので、その２点についての参考人招致としたいと思いますので、今、川添委員のほうからおっしゃったことも十分踏まえながら招致していきたいと思います。

以上で、日程の全てを終わりました。

川添委員、ありますか。

○委員（川添公貴）ありません。

○委員長（森永靖子）よろしいですか。

―――――――――――――――

△委員長報告の取扱い

○委員長（森永靖子）それでは、次に委員長報告の取り扱いについてお諮りします。

先ほど調査いたしました平成２８年熊本地震における川内原子力発電所の状況について、６月定例会において委員長報告を行いたいと思いますが、御異議ありませんか。

［「異議なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）御異議ありませんので、そのように決定いたしました。

―――――――――――――――

△閉　　会

○委員長（森永靖子）以上で、本日の委員会は閉会したいと思いますが、御異議ありませんか。

［「異議なし」と呼ぶ者あり］

○委員長（森永靖子）御異議ありませんので、以上で、川内原子力発電所対策調査特別委員会を閉会いたします。お疲れさまでした。

薩摩川内市議会委員会条例第３０条第１項の規定により、ここに署名する。

薩摩川内市議会川内原子力発電所対策調査特別委員会
委 員 長　　森　永　靖　子